

戦時中の体験を聞く会

共催：東松山市

語り手 すぎもと 杉本 こういちろう 孝一郎 さん

演題『東京での空襲体験』

体験を聞く会の様子

【プロフィール】

1932（昭和7）年 東京都中央区生まれ。

1945（昭和20）年 東京で雪の中、艦載機による機銃掃射を受け、5歳と3歳の妹を連れ、逃げた経験を持つ。

所沢市、狭山市の小中学校を中心に「戦争体験を伝える語り部」として自身の体験を語る活動を精力的に実施しています。



【お話の内容】

父親が京橋で事業を行っていたので、現在の中央区で育ちました。6人兄弟の長男です。当時の東京の下町は「食べ物の下町」などといわれるように、物が大変豊かでした。よく両親や兄弟姉妹と外で食事を楽しんだりしました。国民学校（現在の小学校）に入学したのは1938（昭和13）年でした。前年に日中戦争がはじまりましたが、東京を中心とした日本の様子はあまり変わらなかったように思いました。毎日、友達と楽しく遊んでいました。夏休みには家族で親戚の家や海水浴や山へ遊びに行ったものでした。

国民学校4年の1941（昭和16）年12月8日、朝学校で担任の先生から、日本がアメリカと戦争を始めたことを聞きました。先生はその時「いずれ日本は戦争に負けるよ」とクラスの生徒たちに言いました。今ではとても勇気のある先生だったと思います。当時は特別高等警察が国民の動向を監視している時代でした。

開戦直後の1941（昭和16）年から1942（昭和17）年は、日本に優位の戦況でした。世間は勝った勝ったと大騒ぎでした。俗にいう「チンチン電車」、市電が当時、東京の市中を縦横無尽に走っていました。その電車を「花電車」として戦勝を祝って飾り付けたり、戦勝祝いの提灯行列が行われたりしました。

しかし戦況は次第に悪化していきました。サイパンや硫黄島の陥落後、東京にもB29が飛んでくるようになりました。1943（昭和18）になると、我が家でも防空壕を掘ることになりました。東京にいては危ない。第2人は新潟県と山形県の県境にある温泉場に集団疎開に行く事になりました。

そして1944（昭和19）年の3月、私は国民学校を卒業しました。東京は連日の空襲が激しくなり、夜も安心して眠れない有様でした。食べ物はだんだん少なくなって、配給制になっていました。食べ物がなくて、千葉県習志野へ、母の着物をリュックに入れて、父と2人で農家を回り、物々交換でやっとの思いで食料を手に入れたこともあります。こうした過酷な生活の中、本所に大きな爆弾が落ちました。家から1キロあるのに、閃光と大きな地響き。地方に逃げるしかないと思い始めました。

そして1945（昭和20）年の2月の末、大雪の日のことでした。朝、空襲警報も鳴らなかったのに、連合国軍の航空母艦から、艦載機による空襲がありました。私は5歳と3歳の妹を連れ、裸足で防空壕に逃げました。艦載機から100メートル足らずのところ、機銃掃射を受けました。操縦士の顔がはっきり見えるくらいの近さでした。母は生まれたばかりの末の弟を抱え、逃げることもできず、家の中で震えていました。そして私たち家族は新潟に疎開することを決心したのです。

日本は世界で今、最も幸せだと思えます。現在の平和もいつ崩れるかわかりません。1人1人の平和への思いを是非、受け継いでいってほしいと思えます。どんなことがあっても、戦争だけは絶対ダメだと思えます。